

9 先天性総胆管拡張症術後26年で発生した膵内胆管癌の1例

佐藤 洋・土屋 嘉昭・野村 達也
佐々木俊哉*・青柳 智也*・本間 慶一**
川崎 隆**

県立がんセンター消化器外科
同 内科*
同 病理**

10 近赤外線画像システムによる膵癌微小肝転移検出

－第3報：病理学的見地からみた癌蛍光のメカニズム－

横山 直行・橋立 英樹*・大谷 哲也
登内 晶子・眞部 祥一・高橋 遼
八木 寛・小林 和明・岩谷 昭
山崎 俊幸・桑原 史郎・三尾 圭司*
渋谷 宏行*・片柳 憲雄

新潟市民病院消化器外科
同 病理診断科*

11 膵頭十二指腸切除後のロストチューブトラブル

仲野 哲矢・皆川 昌広・高野 可赴
滝沢 一泰・小林 隆・坂田 純
若井 俊文・塩路 和彦*・黒崎 功**

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野
新潟大学医歯学総合病院
光学医療診療部*
白根建生病院外科**

12 2012年IPMN国際診療ガイドラインの検証－分枝型IPMNに対する手術適応－

高野 可赴・皆川 昌広・滝沢 一泰
石川 博補・仲野 哲矢・廣瀬 雄己
新田 正和・坂田 純・小林 隆
若井 俊文・塩路 和彦*

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野
新潟大学医歯学総合病院
光学医療診療部*

13 膵移植の現状と当科の経験

小林 隆・石川 博補・須藤 翔
山本 潤・仲野 哲矢・廣瀬 雄己
滝沢 一泰・高野 可赴・新田 正和
坂田 純・皆川 昌広・野上 仁
小杉 伸一・若井 俊文

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野

【膵移植の現状】1966年にミネソタ大学で膵移植が世界で初めて成功してから、現在まで世界で37,000例以上が実施され、年間1,200例前後が施行されている。1型糖尿病を対象とし、その目的はインスリンや血液透析から離脱させ、QOLを改善することにあるが、長期的には生命予後を延長させることにある。膵移植は膵腎同時移植（SPK）、腎移植後膵移植（PAK）、膵単独移植（PTA）の3つのカテゴリーに分けられる。SPKが最も多く施行されており、理由は1型糖尿病患者で腎不全を合併すると予測余命が5-8年と短縮する、膵単独移植に比べ、生着率が高い、等があげられる。2004年以降の国際膵移植登録症例では3年生存率91%、3年生着率79%（SPK）と良好な成績である。本邦においては1997年臓器移植法実施後2011年12月まで121例の膵移植が実施。うち84例が2010年7月の臓器移植法の改正後に実施された。本邦においては高齢、血行動態が不安定、昇圧剤が必要なマージナルドナーが約73%（欧米は10%程度）と非常に不利な条件にもかかわらず

らず、移植臓の生着率は1年85%、3年79%、5年72%と欧米と遜色ない成績である。

【当科の経験】現在まで3例の膵移植を実施。2006年に1型糖尿病の女性に対し生体PTA、2007年に同様に1型糖尿病の男性に対して生体PTA、さらに2011年に腎不全を合併した1型糖尿病の女性に対し脳死SPKを実施した。1例目は生着したもののインスリン離脱には至らず、2例目は術後早期のグラフト血栓によりグラフト機能喪失となった。3例目は移植後約2年経過しインスリン離脱継続、腎機能も良好に保たれている。移植チームのトレーニングとして2013年5月および6月に藤田保健衛生大学で行われた脳死PAK手術参加。また8月に多施設多臓器での臓器摘出合同シュミレーションに参加した。

14 胆膵領域における内視鏡的胆管ドレナージ症例の検討からみた Life - saving Endoscopy in Emergency とは

佐藤 宗広・古川 浩一・小川 光平
倉岡 直亮・五十嵐俊三・相場 恒男
米山 靖・和栗 暢生・杉村 一仁
五十嵐健太郎

新潟市民病院消化器内科

15 肝胆膵術後頻脈性不整脈における塩酸ランジオロールの効果

皆川 昌広・仲野 哲矢・廣瀬 雄己
石川 博補・滝沢 一泰・新田 正和
高野 可赴・坂田 純・小林 隆
若井 俊文

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野

【背景】肝胆膵外科手術など侵襲の高い手術の術後において、交感神経緊張、脱水、電解質異常などが起因となり術後頻脈性不整脈が生じることがある。今回、我々の施設における術後頻脈性不整脈に対する治療症例を retrospective に検討

し、薬剤選択の参考となるエビデンスがあるかどうか検討した。

【方法】2007年から2012年までで当科において術後薬剤治療を要する頻脈性不整脈を発症した104例のうち、肝胆膵手術（肝移植レシピエントを含む）術後25例を対象とした。症例のうち投与薬剤別（塩酸ランジオロールL群、塩酸ベラパミル；V群、ジゴキシン；G群）にみたのべ36例の治療効果について検討した。

【結果】症例の内訳は、肝切除8例、膵切除（PDを含む）7例、移植レシピエント7例、その他3例であった。症例の術後経過中にL群15例、V群11例、G群10例の使用（のべ）があった。対象となった頻脈は、Af11例、PSVT5例、洞性頻脈18例、その他3例であった。薬剤の奏効率はL群が93.3%（14/15）V群が63.6%（7/11）、G群30.0%（3/10）であった。奏功例のうち6時間以内の再発率はL群0%、V群27.5%、G群33.3%であった。また、薬剤投与後30mmHg以上の血圧低下が、塩酸L群に1例、V群に4例認められた。

【考察・結語】頻脈性不整脈に対する薬物治療として塩酸ランジオールの奏効率は有意に良好であった。また、投与後の血圧低下も少ないことから、塩酸ランジオールは術後頻脈性不整脈に対する治療として first choice と位置づけられると考えられた。